

Akatake Times

Vol. 68
(通算 第221号)



『ツバメが飛んだ』

通勤途中、子供を預ける保育園でツバメが巣を作っていたので思わずパシャリ。
雛鳥から巣立つまでの間、親のごとく毎日様子を見ていましたが
1ヶ月も経たないうちに巣立ってしまったことにビックリ！！
巣の下には大量の糞が落ちてしまうので掃除する人は大変そうだなと思いつつ、
害虫を食べてくれることから益鳥とされているようです。
近年は自然環境の変化や巣を作る場所の減少などでツバメの数が減少傾向にあるとのこと。
毎年同じ場所に巣を作る習性があるため、見分けが付きませんが
同じツバメが戻ってこないかと来年も楽しみに待っていようと思います。

撮影日2025年7月31日

営業部 営業課 植野 友貴

◆太陽の塔を知っていますか？

太陽の塔は、55年前の1970年に開催された大阪万博のテーマ館の一部として、芸術家 岡本太郎氏によって建造されました。大阪万博の時、私は小学5年生でした。社内で記憶に残っている方は少人数かと思いますが、テレビ越しに見るその世界はとても輝いていて、この太陽の塔を始め、歩く歩道・人間洗濯機・ワイヤレスフォン・そしてアメリカ館の月の石など、高度成長期であった日本中の熱気が伝わってきて、現地に行くことは叶いませんでしたがとてもワクワクしたことを覚えています。

そんな当時の夢を叶えるべく5月に休暇をもらい、太陽の塔がある万博記念公園と、現在開催中の大阪関西万博に行ってきました。記念公園では過去の展示物から当時を色々想像できました。そんな私の熱い思いとは裏腹に、開催中の万博は既に開幕から3カ月余り経過していましたが、距離的なこともあるのか私の周りで行った人に出会わず、関西との温度差を感じるのは私だけでしょうか。個人的には、55年前の万博跡地と現在万博の両方楽しめたことはとても満足です。



◆万博って？

そもそも万博って何なんでしょう・・・？

当時の日本はちょうど高度成長期だったこともあり、近未来や最先端技術が披露される場としてのイメージが強かった印象がします。

しかし調べてみると、本来は『人類の今』を共有する場だったようです。

今から170年以上前の19世紀、まだ誰もが自由に世界中を行き来できなかった時代、

1ヶ所に世界中のものを集めて、多くの人に見てもらおうという発想が生まれたとか。

そう考えると、「過去の芸術が現在と未来を生きる糧になる」というコンセプトのもと、2000年の時空を超えて、国宝級の展示をしている話題のイタリア館が放つメッセージは、

聞き深かったです。



中でも古代ローマ時代の「ファルネーゼ・アトラス」。その重厚感ある造形美は、1時間40分並んだ疲労感さえ吹っ飛ばすくらい圧巻でした。

ダヴィンチの原画は、立ち止まり禁止で警備員さんに促されるので、写真を撮ってもブレるしで、じっくり見られず(ー;))

一方イタリア館に比べ少々残念だったのは、黒潮がテーマのスペイン館。いよいよ来年完成！と言われているサグラダ・ファミリアの140年余りの軌跡を紹介してくれていたなら、もっと盛り上がっただろうな～と思いながらパビリオンを後にしました。

◆ミyakumiyakuからのメッセージ

公式キャラクター「ミyakumiyaku」。

初めて目にしたとき何とも奇抜で摩訶不思議な姿に「何これ！？」と驚いた方も多いのでは？

ミyakumiyakuは、赤い部分は「細胞」、青い部分は「清い水」を表しており、細胞と水がひとつになった不思議な生き物のとのこと。また、名前の由来は「脈々」と受け継がれてきた人間のDNA、知恵と技術、歴史や文化などあらゆる可能性をその身に宿し、人間の素晴らしさを脈々と未来に受け継いでいこうと、希望を込めての命名だそうです。デザインやネーミングの由来を知ると、その見方も変わりました。

今や、キモかわいい！と、グッズも入手困難な大人気のミyakumiyaku。

そんなミyakumiyakuが気になった方、是非とも来場してミyakumiyakuに会ってその想いを受け取ってきてください。

そして、願わくば当社の先人たちが培ってきた知見や技術がミyakumiyakuと受け継がれますように・・・。また、現在の子供達も、当時の私と同じように2025年の万博が、希望と共に楽しい記憶として未来に繋がってくれればと思います。



常務取締役 山本 明生